

りましたが、それが私の日本に引揚げてからの第一の働き場所であり、其後二十年間炭鉱生活を送った縁となつた次第です。

後書

終戦後すでに四十五年を経過し、一緒に引揚げ元気であつた母も既に亡く、世は昭和から平成へと移り変わつて引揚げのとき三十歳の私もすっかり老年者となりました。今は子供、孫と一緒に平和に暮らしておりますが、この平和が永く続いて、二度と子供や孫達に私達のような戦争の苦しみを味わせたくないものです。

又日本に引揚げることもできず樺太で亡くなり、現在の平和を味わうこともできなかった先輩、同僚には心から冥福を祈つてやみません。

磯舟に乗って逃げ帰つた

北海道 満月 敏

昭和二十年八月十五日、戦争は終結した。弥満小学校

長の連絡で終戦を知つた。佐瀬校長は、職員各戸を走り廻つた。一同は驚き、市街地中央の十字路口面に車座になり、知床村の方針、日本国の今後の政策に、樺太庁に電話で問い合わせも返信なし。大泊町からも通達なし。村民はうろたえるのみでした。

十六日、知床村は樺太を引き揚げると発表があり、各戸に戸籍謄本と非常用に米二斗、砂糖の配給がありました。荷物は三個と限定されましたが、家の中の物、三個となれば、あれかこれかと出来上がらず、夕方になって大きき一尺五寸立方と変わり、手持米イリ米にと、指示が出た。毎時変わる、班内連絡や、荷造りで役場行き。

十七日は連絡船の割当が知床村にはなく、十八日、女・子供は朝七時にバス停に集合。先を争う人ばかりで、役場職員は日本刀で乗車整理。青年学校職員家族と妻と子供、姪の四人は一番車に乗れたが、男子は自家用の馬車で、私はリヤカーに三個の荷物を持って、大泊港に向かったが、長浜でパンクし、修理出来ずそのまま大泊船見町に、午後十時過ぎ頃到着した。

集合地、小林綿屋で皆が待っており全員集合できた。

大泊棧橋の乗船事務所に連絡すると、知床村の順番は終結次第というので、十九日は朝から棧橋通りに集合したが、知床村全員の集団は後方で、棧橋までは四、五百人はおり、昨夜もここで夜明かした様で、子供の泣き声や迷子を大声で呼ぶ人や、三十歳前後の婦人は背にわずかな荷物とその上に子供を十字型に二人背負う姿。母親の愛と追われる者の心理から出る、女の体力であろう。

十九日は午後、樺太といえども晴天続きで、高温のため、此のさまでは病人が出てきては困ると思い、大泊町から米や筵の配給を受けて、船見町漁業者の加工場の一部引き揚げて順番待ちを交代制にしたが、日が立つに連れ棧橋通りは、持物を整理して捨てる品で山となり、すべての品が新品ばかり。大型ののこぎりも木のさやに入っていたが、荷物が重くて夫婦喧嘩が始まる。別の老夫婦は、背負い荷物の中で、ぼんぼん時計が時を知らず。

二十三日午後十一時、棧橋事務所から疎開中止と発表があり、このとき、知床村は解散となった。

二十四日、大泊町内の空家に知人集合。二十五日、ソ

連軍上陸開始と同時に、男子は船見町駅に集まった。元軍人らしき者、及び働ける若い者数人が拘引された。私は運良く逃れたが、此のさわぎで大泊町から白い布及び白紙を手にしなれば外出禁止。また、各家に白布を軒先に出すよう通達が出た。二十六、七、八日ソ連軍の使役に、男子全員出役させられたが、その仕事は日本人の荷物の没収。荷物は引き揚げ者が持って来た大切な心のこもった一家の財産で、大泊駅構内全線の各列車、貨車、客車、みな満載の品。棧橋内の待合室の荷物は私共の手でソ連のトラックに積込む。その悔しさを今も思い出せば悔しい限りです。引揚者の財産は、祖先からの苦勞が産んだ宝なのです。

二十八日夕方、大泊町から二十九、三十日、現住地に帰るよう、その後はソ連兵の歩哨が立ち、大泊から移動出来ないと通達があり、引き揚げを断念して、知床村へ帰ることにしたが、馬も車も誰が持って行ったのか無いため、誰かが見つけてきた馬車に荷物をたのみ、皆で徒歩で二日かかって知床村に帰ったが越冬する気にはなれなかった。

四、五日したら、ソ連軍の指揮官がトラックで弥満市

街に来て、家の中の荷造りした品は全部持って行った。

皆、荷物を隠すのに苦労したが、毎日別の車が来て、弥満市街地から、手当たり次第に持って行くので、此の分では永住などむりで、札搭部落まで三里の道を知人の車で荷物運び。この先、岬まで八里、白岩まで三里行くところになり、札搭方面からは岩間があり見えないので、磯舟で荷物を運ぶことにしたが、舟を進ませることが出来ず、丘でロープを引き、竿でかじを取り、岩の浅瀬の所は海に入り引き舟をしたりして、白岩の入り海の所に到着したが、別の組は漁業者で、沖の方から荷物舟で到着した頃は、朝食時でした。午後、沖の方の弥満港に向かう密航船が見えたが、札搭部落からソ連兵に銃撃されて引き返すのを、私共の舟は磯舟で小さく札搭から見えないので沖に出迎えに行った。

お陰様で、白岩の避難者は全員乗船出来たが、一人三百円で、荷物はなるべく少なくというので、我身にかえられず、半分は捨てた。夜、出航し、国境線の四か所の見張りがある中を、小舟のため通過出来て二十年十月一

日無事、手塩港に上陸した。

夜空を赤く染めて炎える豊原を後に

北海道 高橋 敬子

子供の頃からの医者嫌いは五十路も半ばというのに、いっこうに直らない。特に歯痛で七転八倒しながらも歯科医に行く気になれないのは、単に医者嫌いというよりも、あの歯をけずるやすり音がB 29の襲撃音を思い出させる。

終戦当時私共家族は、樺太の内路に居住しており、さほど大きな街ではなかったように記憶しているが、街には憲兵隊があり軍の飛行場があったためB 29の集中攻撃を受けたものと思う。

空が暗くなるほど雨あられと爆弾を投下して行くさまを、防空壕のすき間から息を止めて見ていたことがある。

防空壕の上には敵の目をあざむくのだと、母親がまい